

## 学びの共同性づくりを考える

学習者が自ら問い、自ら学ぼうとする姿勢を身に付けるためには、「学習者」―「授業者」間のやり取りだけではなく、「学習者」相互の集団的な学習活動の場をどのように構築できるかが、重要な鍵を握っていると考えられます。現在明星学園では、「12年間の明星教育」を一貫する目標として、「他者と共同しながら主体的・創造的にたくましく生きていく子どもたち」を育てるという理念を掲げています。他者との「共同」が個人の主体的な生き方と矛盾するのではなく、むしろ他者との「共同」の先にこそ、真に主体的な生き方があると考えるところに、明星教育の独自性があるともいえます。

「学びの共同性づくり」は、すぐに/簡単には実現できない、長期的な視座や持続的な取り組みが求められる、難しい教育実践です。そもそも共同性とは何か、共同性づくりに教科の特性による差異があるのか、従来の講義型授業とのバランスはどうかなど、考える問題は多数あります。今回の公開研究会は、何かできあがった授業モデルを提示するというよりも、「学びの共同性づくり」をこれから模索していくきっかけとなるような研究会にしたいと考えています。テーマに「考える」と入っているのは、そのためです。

2014年度から小中合同で開催してきた公開研究会では、これまで、「本物のかしこさを育てる学びを目指して」(2014年度)、「意欲を引き出す授業とは」(2015・2016年度)という全体テーマを掲げてきました。今年度はこれに「学びの共同性づくり」というテーマを加えることで、授業や学びについての実践論を、さらに深めていくための機会にしたいと考えます。ご多忙とは存じますが、是非、ご参会の上、ご意見をお聞かせください。

明星学園小学校 校長 福田 純一 明星学園中学校 校長 河住 貴夫

●2017年11月25日(土) 於：<sup>みょうじょう</sup>明星学園小・中学校

●参加費：無料(資料をご希望の方のみ資料代1,000円 当日受付にてお支払いください)

※ 学校周辺にはコンビニエンス・ストアが1軒ある程度です。お昼をご持参くださることをお勧めします。

●参加申し込み：本校のホームページをご覧ください。 <http://www.myojogakuen.ed.jp>

●時 程

受付 8:00～ 公開授業(1校時 中8:45/小8:50～ 9:35)

提案授業(2校時 中9:45/小9:50～10:35)

※ 小学校6学年12クラス、中学校3学年12クラスで授業を公開します。

全体会(10:45～12:30)(いちょうのホール)

特別講演 金森俊明氏 「子どもと世界を読み解く～共育・響育・協育～」

子どもの世界を子どもと共に読み解き育ち合う

子どもの世界と、今・これからの世界(地球社会)の両者を交錯させて、読み解き育ち合う

子ども自らが、子ども世界を立ち上がらせていくことを読み解き(描き、組織し)ながら育ち合う



### 【金森俊明 プロフィール】

1946年石川県能登生まれ。金沢大学教育学部卒業後、小学校勤務38年を経て、北陸学院大学教授。現職中の実践がNHKスペシャル「涙と笑いのハッピークラス～4年1組命の授業～」で放映。先生の教育思想は、教育界のみならず、医療・福祉関係者から高い評価を受けている。

## 分科会案内 分科会(13:30~16:30) 分科会は、以下A~Gの7分科会です。

### A：小学校 算数「友達とわかり合う授業作り」～タイルの有効性を活かして～

2020年文部科学省学習指導要領改定に向けて、アクティブラーニングの主張は、「主体的・対話的で深い学び」という文言に変わってきました。これに関しては、何ら異存はありません。しかし、こうした学びを保障する為には、学習内容や方法を学年の発達段階を考慮しつつ、検討していかなければならないと思っています。

私達は、授業で、子どもたちが数操作だけではなく、自分たちで計算の仕組みを発見的にとらえることができるような授業を心がけています。また、こうした場で、量感を捉えつつ、子どもたちが互いに自分の考えを主張し合い、聞き合いながら授業を進める手立て、共通な言語としての「タイル」が有効であると考えています。

教育現場の一部では、「タイルはもう古い」ということが主張されていますが、改めて、このタイルの有効性について、上記のテーマと重ねながら検討していきたいと思っています。

- ・講師：正田 良(国土舘大学教授)
- ・司会：秋田 敏文(世田谷区立弦巻小学校)
- ・提案授業：岩橋 恒平(4年生)
- ・関連授業：河住 由美(1年生)

### B：小学校 国語「豊かに読むことを豊かに書くことにつなげるために」

本校では、「卒業論文～12歳の主張～」という学習活動を小学校国語の最終的な課題としています。毎年、子どもたちは、自分にとって興味深いテーマを自分自身で選び、事実に自分自身の考えを織り交ぜ、自分自身で深めながら、自分自身の主張を展開していきます。これまでの卒論指導と今の子どもたちの現状を見たとき、「書く力を育てる」という大きなテーマにあたりました。

読む価値のある文章を読みながら、豊かに読み解いていくなかで、文章の中の仕掛けに気がきます。その仕掛けに気付くことが豊かに「書く」ための第一歩です。最終目標を6年生の卒業論文におき、授業では、文章の中の仕掛けから豊かに読み取り、豊かに「書く」ことも一緒に考えていきたいと思っています。

- ・講師：上西 信夫(文芸教育研究会)
- ・司会：未定
- ・提案授業者：淘江 正仁(5年生)
- ・関連授業者：根岸 あずさ(2年生)

### C：特別活動 「自分たちの学校 自分たちでどうする」

学校の主役は子どもです。子どもたちが、自分たちの生活や学びの場をどう創っていくか。本分科会は、そこに迫っていききたいと思っています。子どもたちが、自分たちの生活や学びの課題に気づき、話し合い、現実を変えていくこと。その過程の中で、自分自身を見つめなおしたり、友達の素晴らしさに気づいたりするでしょう。また、自分たちの思いを実現するプロセスから、自由と責任の両方を実感するでしょう。教師は、子どもたちのつぶやきをどのように受け止め、広げていくのか。子どもと共に現実を変えていくことができるのか。ご参会のみなさんと一緒に考えていききたいと思っています。

- ・講師：金森 俊明(元小学校教員・北陸学院大学教授)
- ・司会：平田 和孝(元明星学園小学校校長)
- ・提案授業者：小関 大輔(6年生)
- ・関連授業者：入野 美紗(1年生)、伊野 文子(4年生)

### D：小・中学校 理科 「音の学習をどう構成するか」

音は光と並び、人間の感覚器官によって感知することのできる物理現象です。私たちのカリキュラムでは、光に関しては多くの時間を割いている一方、音に関しては不十分でした。そのためカリキュラムを整備する必要があり、今回、学習プランを提案する次第です。

音は光以上に、波の振幅や成長を捉えやすい物理現象です。高等学校での物理における波の性質につながるような側面をより強調して認識できるよう、音の学習を位置づけて学習プランを構成してみます。その中で、音の感覚器官である耳の構造についても、音の感知の仕組みが理解できるような形で扱いたいと考えます。

- ・講師：及川 靖広(早稲田大学教授)
- ・司会：未定
- ・提案授業者：平山 勲(7年生)

### E：小・中学校 社会 「草の根の人物から考える東アジアの近代」

本校社会科では、歴史分野の学習を東アジアの中で位置付けようと近年取り組んできました。本年度は日本統治下の朝鮮半島を取り上げ、日朝関係が悪化する時代にありながら自らの意思に基づいて行動した日本人浅川巧の教材化を試みます。

浅川巧は朝鮮林業試験場に勤務し朝鮮半島の林業再生に取り組んだほか、朝鮮陶磁器を愛で、柳宗悦らと朝鮮民族博物館の設立に尽力した。こうした地道な取り組みにより、浅川巧は日本統治下という特殊な状況下でありながら、多くの朝鮮人に慕われ、死後はソウル市郊外に大切に埋葬されました。とかく政治状況の解説に傾倒しがちな近代の学習において、権力側とは異なる立場から草の根の活動を続けた浅川巧を教材化することにより、当時の社会背景や朝鮮半島について理解を深め、今日の日韓情勢を考えるきっかけにしたいと考えています。

- ・講師：三橋 広夫（早稲田大学教育学部非常勤講師）・司会：渡辺 京（元明星学園中学高等学校校長）
- ・提案授業者：高橋 珠州彦（9年生）

### F：英語 「『モチベーション』を引き出す授業を考えるー「～現在進行形～」

「アクティブラーニング」の流れを受け、英語教育の中では生徒が主体的に学習に取り組めるよう、ゲームなど生徒が楽しんで参加する要素の多い活動が増えている一方、楽しんで活動するだけで「アクティブラーニング」とは言えないという議論もあります。

本校英語科では、子どもたちが何かを学ぶときに不可欠である「モチベーション」には楽しさだけでなく、ほかの多くの要素も含まれていると考えています。子どもたちが英語を学びたいと思う理由はさまざまですが、楽しいからだけではなく、かといって成績や評価のためだけでもない、主体的に学ぼうとする学習者を育てるためには「モチベーション」が重要な鍵を握ります。本会では、「コミュニケーションツールとしての英語」「自分にとって身近なことについて表現する」などをキーワードに、英語のみならず教科を超えた課題である「モチベーション」を取り上げ、どのような授業が生徒のモチベーションを引き出すことができるかを考えたいと思います。

- ・講師：阿野 幸一（文教大学国際学部教授） ・司会：入江 潤（明星学園小学校英語科教諭）
- ・提案授業：高山 瑤子（7年生）

### G：中学校 数学 「身の回りにある数学を」ー学校選択授業の数学ー

#### 関数を幾何的扱いと切り離して指導する

中学の教科書における関数分野は、関数の指導と幾何的扱いが混在しているので、生徒にとって関数がよくわからなくなっているという実態があるように思えます。本来の関数概念は、『入力を決めると出力が決まる』という方向性を持っており、関数グラフでは入力軸の目盛りスケールと出力軸の目盛りスケールは独立しており、任意に決めてかまわないものです。それに対して、幾何的扱いをするグラフでは、「2変数の間に方程式の縛りがあるだけ」の座標幾何を扱っていることになります。そこでは、入力→出力という方向性はなく、縦軸・横軸は同じスケールでなければなりません。このように関数の指導では、本来全く別の世界のものを一緒に教えていることになるので、どちらの世界も中途半端な理解になってしまうのではないかと考えます。そこで今回は、関数と座標幾何を切り離して指導することで、それぞれの世界の見方・考え方をきちんと理解できるようにすることを重視したプランを提案します。

- ・講師：未定 ・司会：未定
- ・提案授業：平野康弘（9年生）